

岩倉使節団の観た欧米の文明度

新井宏

「計量史学会」で北大名誉教授の高田誠二先生とご一緒している。先生は、『単位の進化』をお書きになったこともある物理学、計量学や計量史の泰斗であるが、『維新の科学精神』（朝日選書）や『久米邦武』（ミネルヴァ書房）の著書でも知られるように、久米邦武の『米欧回覧実記』について、科学技術面を掘り下げた研究でも業績を挙げられ、最近も「計量史学会」で『実記』に記された「ドイツ史上の面積単位モルゲン」についての論考を紹介されている。

明治五年から六年にかけて維新政府の中枢部を率いた岩倉具視の「遣米欧使節団」は、世界外交史上に類例を見ない「珍事」であった。正副使である岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文、山口尚方をはじめとして、理事官として、田中光顕、山田顕義、佐佐木高行ら、書記官には福地源一郎もいて、日本に残った政府要人は、三条実美、西郷隆盛、山県有朋、大隈重信、板垣退助くらいであり、政権基盤が固まっていない時期にあっては、まさに奇跡であった。

この使節団の総勢百七名の公式報告書『実記』五巻を独力でまとめたのが久米邦武である。

久米邦武は、儒学者の古賀謹堂に師事し昌平黌に学び、後に歴史学、古文書学で優れた業績を残したように、儒学を基礎においた第一級の教養人であった。したがって、彼の『実記』は、日本における研究対象としてだけでなく、近年では欧米でも、東洋の教養人が観た米欧として、研究対象とされている。

その中には、十九世紀の先進大国の華麗な物質文明に眩惑されなかった新興の意気に燃える維新知識人の見識を紹介した論文もある（註1）。

久米邦武は、『実記』で欧米各国の「文明度」を次のように分類しているというのである。

優等国（デンマーク、スウェーデン、スイス、オランダ、ベルギー）、中等国上（ドイツ、フランス）、中等国下（英国、米国）、劣等国上（オーストリア、イタリア、ポルトガル）、劣等国下（スペイン、ロシア）。

面白いのは、当時の大国である英国、ドイツ、フランス、米国よりもデンマーク、スウェーデン、スイスなどを上位に置き、イタリアやポルトガル、オーストリアを日本と同等あるいは以下と見なしていることである。

ちなみに、最近の国別ランキング（註2）によれば「幸福度」では、デンマーク、スイス、オーストリア、スウェーデン、オランダ、米国、ベルギー、ドイツ、英国、スペイン、イタリア、フランス、日本、ポルトガル、ロシアの順であり、「ネットワーク度」では、デンマーク、スウェーデン、スイス、オランダ、米国、英国、日本、ドイツ、オーストリア、フランス、ベルギー、ポルトガル、ポルトガル、スペイン、イタリア、ロシアの順となっている。

幸福度とネットワーク度を総合すると、百四十年も前に久米邦武が与えた評価順とほとんど全て一致している。例外はオーストリアくらいである。これを偶然というべきであろうか。

（註1）毛利俊彦「岩倉使節団の文明論」『明治維新政治外交史研究』吉川弘文館

（註2）www.businessweek.com/interactive_reports/

（前韓国国立慶尚大学招聘教授、元日本金属工業常務、金属考古学、計量史）

